

世界の子どものうた



小 泉 文 夫

一、私と子どものうた

私は、わらべうたなどを調べた時、日本の各地で子どもに接しておりますし、民族音楽の研究のためにいろいろな国に行きました時、ついでに、子どものわらべうたを採集しましたので、その方面でいくらか子どもを知っております。が、私が大学で教えている相手は、もう少し大きくて大学生なものですから、私にはなかなか子どもの気持というものがよくわかりません。

子どものうたというのは、私の専門ではありませんが、十年くらい前から、二つの点で興味をもったのです。

一つは、子どものうた、（おとながこしらえて、子どもにうたわせているうたは除く）子どもが自発的にうたい出したうた、あるいは、元々はおとなが作った学校のうただとか、童謡だとかい

うものであっても、それを子どもが実際の生活の中で遊戯に使っているもの、あるいは悪口うたにして、替うたを作ったものなどの音楽性を調べてみますと、その中にはその民族のもっているものと高級な古典音楽（日本の場合でいいますと、能、義太夫、常磐津、清元といった高級な芸術音楽）ときわめて密接な関係のあることがわかりました。日本音楽を調べようと思い、いきなり、能、義太夫などに取り組みますと、その構造が非常に複雑で、何が基本になっているのかよくわかりません。しかし、わらべうたには、子どもが自然につかんでいる音感が、基礎にあって、それがうたの中で変化しているという形が存在しているので、ある民族の本当の特徴はどこにあるかを調べる時、そのものをすぐとり上げるより、はじめにわらべうたの研究をすることが役立つのです。研究をやさしくするために、つまり研究の方法論の上で

興味をもっているのです。

第二には、わらべうたそのものを調べてみると、その構造は法則性を持っています。おとなが漠然と考えている以上に、例えば単純から複雑へとといった発達段階をもっています。……こんなふうにおとなが分析するとわらべうたは難しくなりますが、子どもはそれを皆、うまくやってのけている。つまり、子どもはすでに音楽性をもっているのです。しかし、おとなが子どもに教えるうたは、西洋音楽であって、本当に子どものもっている音楽性とは関係がありません。わらべうたの音楽感覚とは全く違う、おとながつくった童謡、唱歌でもって、子どものもつ音楽感覚の芽をみとめています。子どものために、と思って考えた教材は皆、こういう現象を生み出しているのです。

子どもにどのようなうたをうたわせたらよいかを考える時、子どもはすでに何をもっていて、何が欠けているかを把握することが大切です。それなのに現在では、その研究が非常に遅れているのです。私は教育分野は専門外ですから、気にはならないけれど、民族音楽をやっていきますと、その現状に黙っていられなくなるのです。先生が与えるものと、子どもがもっているものが本質的に異なっているのですから。こういったことを、いろいろな席上で、今までにも言ってきました。しかし私の意見は、明治以後の音楽教育の努力に水をぶっかけるものだといって反響をうけてい

ます。しかしこれは大切な問題で、この先、この問題を解決するのは、現場と作曲者の提携でやっていくべきことで、私の役目は終わりました。

二、日本の音楽教育の現状

さて、世界の子どもの音楽教育の動向をみますと、一方では、ハンガリーの柯达イなどによる新しい子ども音楽教育が出てきています。一方日本では、明治以後、文部省は指導要領などを通して、音楽教育に力を入れてきました。そして、ごく最近出された指導要領をみても根本的には、明治の頃と変わっていないのです。つまり、子どもには、西洋音楽のいちばんやさしい箇所を教えて、ハーモニー（主要三和音）を育てればよいという教育なのです。あのハーモニカを使つての教育時代と同じなのです。

共通教材をみても、従来通り、文部省唱歌が圧倒的です。そして、あと、おとなの感覚で選んだ西洋のポピュラーな音楽です。それで、北海道から沖縄まで一律にやろうというのです。地域が異なれば、当然、音楽もちがってくるはずなのに一律なのです。

また、現場の先生が自由に教科書を選ぶチャンスもしめ出されています。変わったアイデアでつくったとしても、それが多くの学校で採用されない限り、もうけのうすい教科書では出版会社は破算です。そんなところから、一種あるいは二種の教科書のみが

世に出、先生は選ぶなにもなくなってしまふのです。

ところが、実際の子どもは、北海道から沖縄まで、広くさまざまな風土、社会、環境に暮らしているのですから、音楽はそれぞれかわっていなければ、また、先生のやり方にもくふうが出されなければ、子どもにあったものにならないのです。

皆さんが、今、育てている子どもたちも、やがて、こういう恐しい（教育をする）小学校に入っていくのです。そして、それまでに伸びてきた芽を、西洋音楽で、ぬりつぶされるのです。日本音楽はわからないが、西洋音楽はある程度わかる、しかし、リード、シャンソンなどことばの本当の意味がわからず、何となく、旋律だけでわかったような気になる、という人が、どんどんつくられているのです。そして、やがて、その人たちが、次代の日本音楽をつくる人となるのです。

今、生きている人には、その次の時代の日本音楽の方向づけをする責任があるのではないでしょうか。

三、わらべうたの魅力

子どものうたに移りましょう。

子どものうたには、たくさんの種類があります。ご注意ください上げておきますが、「わらべうたは古いもの、昔のもの、なつかしいものだ。現代の子どもがうたうものではない」と考えている人

がいるでしょう。そういう時、私はその人たちに、こう言います。「あなたたちにとって、わらべうたは、古くて、なつかしいものかもしれない。なぜならあなたたちは古いから」と、しかし、子どもにとっては、古いものでも、なつかしいものでもない。そして現に、子どもはうたっています。

例えば「青山土手から」は、元はおさよと源次郎の仲をうたったものですが、子どもにいわせると、そんな仲などどうでもよく「泣いて、袖を洗って、たたんで……」がおもしろいのです。余分なところはどんどん省略していき、とれて「隣の○○さんは涙がポロポロ」にまでなっておさよも源次郎もいなくなっています。つまり古いものが古いまま、残っているのではないのです。わらべうたは、遊びに使われるのですから、多くのものは遊びにあらうようにかわっていきます。

もう一つ例をひくと、縄とびに使われるうたの「郵便やさん、走らんかい」の「走らんかい」は、関西弁ですから、その意味が関西では「走らないのか」と通じますが、関東ではわからないから「郵便やさん、ハ克蘭カイ（博覧会）」になってしまつてうたわれているのです。

古いものでも新しくなっている。古いうたが残っているといつても部分的で、内容的には、新しくなっているのです。



関東では



関西では

四、わらべうたの特色

しかし例外があります。たとえば「通りゃんせ」や「ずいずいずっころばし」などはもうわらべうたではないのです。なぜなら、北海道から沖縄まで一律ですから。わらべうたなら、言葉のアクセントがちがうのですから、当然、メロディがちがってくるはずです。例えば「ひらいたひらいた」は、幼稚園などで教えて、きれいに清書してしまつて教育のためのうたになつてしまつたのです。(上図楽譜参照)

逆に、元は唱歌だったが、わらべうたになつてゐるものがあります。たとえば「二宮金次郎」とか「金鶏輝く日本の」(今は山中、今は浜(汽車のうた))など。「今は山中」は「今は夜の三時頃」とかわつてわらべうたになつてゐますし、「松原遠く、消ゆるところ(海)」も「松原父ちゃん、消ゆる母ちゃん」という具合です。わらべうたには、創造性、創意くふうが入つてゐます。少なくともわらべうたであるためには、どんな変形して、生きていなければなりません。今まで、わらべうたは新しいものだ、といつてきましたが、逆に、わらべうたは本当は古いものだ、と矛

盾するようなことを、これからお話ししよう。

最近、新しい東京のわらべうたをみつめました。「太田ドウカン(道灌)」が破裂して、山から財布がコロンブス、財布の中はナイチンゲール……」(かごめの音階でうたう)というものです。内容を見ると、古いこと(太田道灌)から新しいこと(ナイチンゲールやフルシチョフ、マクミラン)まで入つてゐます。しかし、メロディはかごめかごめの音階ですから江戸時代と同じなのです。

新しいものに古いものが入ってくるし、古いものに新しいものが入つてきて、新しい、古いがなくなる、これがわらべうたです。

五、子どものもつ日本音楽性の

素地はどこからくるか

子どもは、伝承法の理論を教わらずとも知つてゐます。それはなぜでしょうか。

西洋文化を輸入するようになってから、日本人はかわりました。パリモードだ何だといつて洋服を着ることにはじまり、さまざまの所でそれはみられます。そして、自分が外人と水準が同じようになつたという錯覚をおこしているのですが、非常にちがつてゐます。例えば、私が、アラスカに行くと「エスキモーが来た」といわれるし、あちらのわらべうた、あやとりなど日本のも

のとよく似ているからやってみせますと更に「おまえは、アラスカのどこから来た」ときかれます。文化が似ているのです。また、タイ人とも、日本人は考え方、感じ方が似ています。

しかし、西洋人とは、ものの考え方がちがう、リズム感がちがう、あいさつの仕方もちがう。それなのに音楽だけは例外で、日本でも西洋音楽という有様です。西洋から大いに学ぶことは必要ですが、そのために自分たちのオリジナリティを失うなら学ばない方がよいのです。このことは、日本人が、日本人であることが、マイナスかプラスかという根本問題にかかわっています。

西洋音楽を教えている人の中で、日本人にソルフエージュを教えると、リズム感が悪くて困るという人がいます。

しかし、日本人は、例えば西洋にない七拍子、六拍子でうたう中に生活しているのです。西洋のように強弱の単位でまとめている中にはいません。まりつきうたの「あなたがたどこさ」を二拍子だけで、三拍子だけで全部まとめようとすることはしない。子どもの中には、それが無いのです。しかし、その人は日本の音楽教育は、すべて西洋音楽になりきらなければだめだという考え方なのです。すべてがヨーロッパ的状态におかれていればよいが、他のものは日本的であり、音楽だけが西洋的であることは不幸です。一部の天才児教育、奇形児教育にはよいけれど、一般の子どもには、それは乱暴な理論です。ドレミファから教えるか、わら

べうたのようなものから教えるかは、日本全体の問題、根本問題なのです。

ではこれから外国のわらべうたのいくつかのテープをかけて聞き、日本と同じようなものがあることを知っておいてほしいと思います。ついでにエスキモーの言葉は日本語によく似ているのでお聞かせしましょう。(テープ)

日本の周辺(関西を中心として)にいくと東北・五島列島のあたりでは、アクセントが平たんになり、フレーズ全体が大きな波のような形になりますが、エスキモーもそうです。そういう、ストレスアクセントのないことが音楽にも反映しているのです。

ではエスキモーのうたを二つお聞かせします。二つは性質のちがうものです。(テープ)

はじめの方は、かくれんぼのうたでエスキモーの本当のうたです。日本語のイントネーションに似ていますね。後の方は、西洋音楽の影響から出てきているもので、エスキモー本来のものではありません。つまり、本来のものと、影響をうけたものと二つ存在しています。それは、ある点ではよいがある点では問題です。

六、エスキモーの生活とあそび

エスキモー調査には、夏と冬の二回行きました。彼らの食事には、ご飯も野菜もなく、あるのは肉だけで、しかも生肉のまま食

べ、ビタミンC欠乏を防いでいるのです。彼らの生活には、ふう家族という単位はありません。しかし、その中にあそびは豊富にあります。あやとり、けん玉のような、骨に穴をあけたもの、おはじきなど。そういう中でエスキモーにしかないあそびを捜し出したと思います。「咽喉ならし」というあそびがあります。最近ではそれをやる人が少なくなっています。女兒が二人口をあいてむかいあい、相手の口の中に自分の声を共鳴させるのを交互にするものです。こういう珍しい（エスキモー独特とも思える）あそびが、全く同じくしてアイヌにもみられるのです。アイヌは氷の家でなく、木の家に住んでいます。（生活環境は異なっています）

こうして考えてみると、わらべうたの中には、おとなの知らないものがあるようです。

七、音楽教育の根本は何か

私は、エスキモーと白人が混って住んでいる所と、そこから更に奥の、エスキモーばかり住んでいる所に行つて、各々の音楽授業のようすをテープにとつてきました。

前者の先生は、教育熱心で「エスキモーの子どもは、どんなに教えても、正しく音楽をおぼえません。エスキモーには、エスキモー音楽を、白人には西洋音楽を、としたいのですが人種差別な

どと騒がれる」ため、非常な努力をして、ドミソの基礎から教えておられました。

後者は、エスキモーの所で先生をすると、白人の所で先生をする場合の三倍の月給がもらえらるということで、でかけて行き、そこでたまたま、音楽の先生が足りず、ギターがひけるといふので、音楽ももつことになった数学の先生です。先生がギターをひくまわりに輪になり、エスキモーだけでうたったもののテープです。（テープ）

前者において、高低の感覚なしで全部同じでうたっているのがエスキモーで、比較的ちゃんとうたっているのは白人という調子です。全く、先生のいわれる「エスキモーは白人の足をひっぱる存在」です。後者は、それに比して、はるかにましですね。格段に音楽的メロディーになっています。しかも、白人はいなく、エスキモーだけです。

明らかに教育の仕方、環境によるものです。さきほどの先生は、熱心にドミソを教えていましたが、エスキモーにはドミソはない。しかし、長音階の基礎を教えねばうたえないと思つている。子どもたちも、一所懸命、声を出しているが拒否している。

一方は、本来、数学の先生だが、子どもを音楽的に教育しようという気がない。自分もいっしょにあそんでしまふので、ギターをもつていっしょにあそんでしまつていふのです。子どもに棒を

はめて、将来のために助けるなどということがない方が、子どもを育てています。なぜなら子どもが拒否しないから。子どもを教育するには、一しよにあそぶことがまず大切なのです。

八、ペルーでの体験

ペルーのクスコは海拔四千メートルの高地にありまして、そこにはインカ帝国の遺跡があります。海拔四千メートルもの高さになりますと、空気が薄くなるため呼吸が普通のところのようなわけにはいかないのです。クスコを訪れた人は、最初の一日か二日は、じっと静かにしてしてから動き出すのだそうです。ところが、私はクスコに着いたその日から、テープ・レコーダーを持ってかけまわってしまったのです。そしたら、今まで貯えておいた酸素がみんななくなってしまう、夜中に急に胸が苦しくなあって、目がさめたのです。目がさめたのはいいのですが、空気が全然入ってこない感じなのです。お医者さんに酸素吸入をしてもらってやっとよくなりました。しかしそこにしばらくいると慣れてきて、歩けるようになりましたが、もちろん、何も持たなくても、かけ出すことはできないのですが。……

その時、こう思ったのです。『おそらく、ケチュア族というインディアンは、そこに何千年も住んでいるのだから、連中は空気の希薄なところでも、飛んだり、はねたり、平気でしているに違

いない』と……。

ところが人間の能力というのは、そんなに変わらないものなのです。ケチュア族の人が、荷物を抱えて坂を上がってくる時など、何にも用事がないのに、立ち止まって話をしていることがよくあるのです。クスコの街はすべて階段になっているのですが、下の広場から、自分の家まで階段を登っていく途中、立ち止まりゆっくり話をして、心臓が慣れるとまたゆっくり上がってくる、しばらく行くと、また立ち話しの続きをしている、そういうことをアメリカンディアンでもしているのです。

音楽の能力とか、その他のものは、民族的に違いがあり、その違いに私たちは興味を持っています。

日本人ならこう思うが、インド人だったらこう感ずるだろう。中国人の音楽理論は、こうだったが、日本人は結局、こういうふうに変えてしまった、とか、アメリカ・インディアンとエスキモーは、こういうふうに違っている、等々。

逆に、人間の能力、音楽的感受性の中にも、案外に、われわれが想像する以上に、共通したところがあるのかもしれない。こういうことをペルーでの体験で感じました。

九、ペルーのわらべうた

そこで、ケチュア語の子どもの歌を録音してきましたので、そ

れを聞いていただきます。 (テープ)

ケチュア語のオリジナルな音楽は、なかなか分からなくなってしまうのです。有名なドボルジャックが新世界交響曲を作りました。あの中で、アメリカインディアンのメロディーを使って作った部分があります。アメリカインディアンというのは、アメリカの南北に、二百種族あまりもいます。その中のどの部族の曲をとりあげたかが問題ですが、おそらく、ボリビアとか、ペルーに住んでいるケチュア語を話すアメリカインディアンのものだろう、という想像がついています。実際に、今日、ケチュア語を話すインディアンの歌を聴いてみますと、ドボルジャックが、新世界交響曲の中で使ったメロディーに似たものが、盛んに歌われていますし、踊りの伴奏にも使われています。ところが、それはメステイソと言われまして、スペインが侵略してきた後で、できたものが主です。その中には、スペイン侵略以前の、昔からのインディアンの要素が、たぶんに入っているのだと思うのですが、どの程度までか、よく分からないのです。こういう、ケチュア語のわらべうたを調べてみますと、本来のケチュア語と、どういうふう結びつくかが、だんだんとわかってきます。

今度は、お手合わせうたです。(テープ) お手合わせうたの類は、世界で日本が一番多いですね。どうして、日本人がお手合わせうたが得意なのか、よくわかりませんが……。日本人が、足よ

り手を大切にするという、一つの大きな特徴があるからかもしれません。それが、しかも古い時代からですので、本質的なものであるかもしれないことを、表わしています。

(テープ、ペルーの通りゃんせ)

通りゃんせ、というものは世界中にあります。アメリカでも、トルコでも、ヨーロッパでも見られます。しかもあそび方は、『オレンジとリンゴのどちらが好きか』とか言って、『オレンジの好きな人は、こっち』とか言って分ける、日本と同じのです。

十、ジャンケンポンについて

(テープ、ペルーの子どもがする、ジャンケンポン)

ジャンケンポンのゲームは、ペルーの山奥だけでなく世界のいろいろな所に広まっています。ジャンケンポンについては、日本の中でも、おもしろいものがあります。普通に考えると、パーはグーより強く、チョキはパーより強いと考えています。ところが、津軽では反対なのです。パーは紙で、グーは石ですから、石がパーンとやると紙は破けてしまう。それから、ある地方では、チョキでなく、人差指、一本なのです。グーはおだんごで、人差指は串なのです。ですから、おだんごを、刺してしまふ。

このように、おもしろいルールのが、日本にもあります。しかし、津軽でも最近はこのようなジャンケンはしなくなり、

特に女の子は東京式のジャンケンをしています、男の人は、津軽式をまだやっています。津軽でこれから文化圏がどのようにして作られていくか、なかなか興味があります。

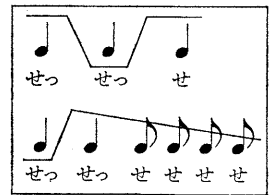
また「ジャンケンボン」と言わないで「ジャラケツホイ」だとか、いろいろな言い方があります。四国の土佐では、グービー（チヨキ）パーと言っています。

外国ではジャンケンをどのようにやるか、興味があったのですが、たいていは、偶数、奇数でやるのです（日本に拳というあそびがあります。あれと同じようなものです）両者の出した指の数を合わせて、それが偶数、奇数のどちらになるか、自分が言った方の（例えば奇数）数になったら勝ちというので、これが伝統的なものです。ところが彼らの中に、ジャンケンボンを知っている者がいるのです。ハワイでのジャンケンボンでは、日本の「あいこでしよ」が言えないし、そんな言葉はないので、“I can't show”と言っているのです。

日本から行ったジャンケンボンが、世界各地にあり、広まりつつあるのは、愉快なことです。私たちは、輸入ばかりして、輸出したことがないから、たまに輸出するとおもしろいですね……。

十一、「せっせっせ」について

その他に、おもしろいと思うのは、ペルーのこの地方に『せっ



せっせ」があるのです。日本では、あそびをはじめるときは、必ず最初に『せっせっせーのよいよいよい』と歌ってからはじめますね。この『せっせっせ』は、日本の子どもたちが、外国へ持っていく、そこで、はやっているのです。日本のように、せっせっせ（図

上）という単純なリズムでなくて、ブラジルでは、せっせっせせ（図下）となりますし、アメリカでは「せ」の発音がありませんから、シー（[si:]）となります。『シー・シー・シー』こうなると意味ができてきまして「見る」「see」「海を見た」「see sea」海の底に宝物があった。それを“sailor”が取ってきた……。いろいろな話を作っています。

日本の子どものわらべうたは、うたの内容から言いますと、非常にエッチなものが、たくさんありますし、悪口うたが多い（唱えうたのように）ですね。

『でぶ、でぶ、百貫でぶ、電車にひかれてベッチャンコ……』

『女をいじめる、やせ男』『先生、先生といばるな先生……』『このカンカン坊主、クソ坊主……』

だとか、なかなかすごいのがありますね。こういう悪口うたというのは大切です。どうしてかという、悪口うたは、例えば「通

りゃんせ」「かごめ」のように、何だかよくわからないがうたおう、というのとは違って、ちゃんと意味があつてうたうものです。言葉の内容というのが非常に重要になってきます。だから子どもは、無意識のうちに、生の日本語とリズム・イントネーションを結びつけます。ですから、悪口うたは、日本語とイントネーションが、どのように関係があるかということを調べるための、非常によい材料になります。

十二、ブラジルのわらべうた

今度、お聴かせするのは、ブラジルのわらべうたです。私は日系人のわらべうたと、ポルトガル系ブラジル人、つまり白人のわらべうたとを、別々に集めました。「日系人のわらべうたには、日本の古いわらべうたが、残っていないだろうか、あるいは、日本のわらべうたが、ブラジルで内地と違った形で発展していることがあるかもしれない」と期待していました。なぜなら、他の民族では、しばしば、そのようなことがありました。

例えば、イギリスではやっていたバラード、物語りうたが、アメリカのアパラチア山脈の山奥でみつかった、などということがあったのです。ところが、ブラジルやパラグアイにいる日本人たちは、昔の日本のうたを忘れてしまいましたし、その中から、新しいものが生まれてくる、ということも顕著には、現われていま

せんでした。

白人の子どもたちは、日系人の子どもたちに比べて、はるかにたくさんわらべうたを持っています。それらは、悪口うたばかりでなく、おとなっぽいうたを、たくさん知っています。例えば

『あなたのくれた指輪はガラスだった。だから、こわれた。』

あなたのくれた愛は、あまりにも少なかった。

だから、その愛は終った。

だから罰として、あなたは歌をうたって下さい』

(テープ、詩を朗読する)

歌に詩が入ってくるところは、日本と違いますね。これはヨーロッパの場合、非常に多いことです。詩のリズムがそのまま、わらべうたのリズムに入ってくることもあるのです。また歌の内容の中に、男女間の愛のテーマが非常に多いのです。「恋」が生活の中に入りこんでいるのです。人間的というのでしょうか……。

その他に、ドミノというあそびがあります。これは、日本のお手合わせうたにあたるものです。(テープ)やり方は、日本の『夏も近づく』に似ています。内容は、

『フェレーラおじさんは、鉄を買ってきた。』

それはガウンにアイロンをかけるために。

この小道が、もし私のだったら、宝石を敷きつめよう。

私の夢を忘れるために、ド・ミ・ノ』

このあたりでは、指あそびもあります。

日本では、

『子どもと、子どもがケンカして、葉屋さんが止めたけど、なかなかやまない、人たちが笑う、親たちやおこる』ですが、ブラジルでは、小指は赤ちゃん、薬指は子ども、お父さんは中指、人差指はお母さん、親指は女中さんです。『赤ちゃんが眠っているのに、子どもが騒ぐので、お父さんがいけない、と言った。お母さんがこちらへいらっしゃい、と言った。最後に女中さんが子どもを寝かせにいった』と同じようです。

また顔あそびというのがあります。目は窓で口はドア、鼻はベル、ということです。子どもは、あそび道具がなくても、自分の身体を使ってあそぶことができるのです。

十三、世界の子どものうたの分類

それでは世界の子どものうたを、どのようにまとめていったらよいか、分類の仕方をお話ししようと思います。

今までに子どものうたを集めておられる方が、世界に、また日本にも、たくさんおりまして、そういう方は主として、うたの歌詞で分類してきました。例えば、柳田国男とか北原白秋とか、また現在でもいろいろな方が、分類しておられます。主として歌詞の内容で分けているものですから。例えば、

◇季節に関するもの……『お正月がござった(年中行事) など』

『鳥追いのうた……』

◇天体で分ける……『お月さまいくつ、十三、七……』『一番星、みつけた……』

◇動植物に関するもの『雁、雁、わたれ……』

このような分類が多いのですが、私たちが考えてみると、このような分け方は実状に即さないのです。なぜかというと、一番の歌詞には動物が、二番目には、植物があったりするのです。わらべうたを歌詞のみとしてとらえるのではなく、それにメロディーがあり、それがうたである。また単なるうただけでなく必ずあそびと結びついている。あそびは身体を動かすこと―運動―と結びついていると理解していくと、わらべうたを歌詞の内容でわけるのは、あまり意味がないように思われます。それよりわらべうたは、他のあそびのためにあるので、あそび道具のようなものです。まりつきの時のまりのように、お手合わせうたがないと、お手合わせはできないのです。よく、「わらべうたなんか、だんだんなくなってしまうよ、こんなに、ラジオ、テレビが普及しているし、学校があるんだから……」などという人がいます。しかし、わらべうたは、数は減るかもしれないし、形が変わるかもしれませんが、絶対になくなりません。なぜならわらべうたはあそび道具の一つだからです。子どもがあそぶことをやめない限り、わ

らべうたは存在します。昔のものが昔のままであるというのでは
ありません。どんどん、新しいのができます。例えば、

『人工衛星、飛ーんだ』『人工衛星、まーわる』なんて言うので
す。時代が変わったから、あそびの内容が変わり、新しいあそび
のうたが、できたのです。

わらべうたが学校唱歌や童謡と根本的に違うのは、あそびの時
に使ううたであり、ただうたのみで存在するのではない、という
ことです。ですから、あそびによって、わらべうたを分類する方
が、よほど実際的です。

私は分類する時に、日本のわらべうたを分けようと思ったので
すが、それと同時に、外国のわらべうたも、その中に分類できる
ような、世界的な分類原理を考えてみたいと思っていました。ち
よっと、日本のものに、当てはまらないところもでているので
が、今まで考えたことを、述べてみたいと思います。

その分け方は、00〜99までの100に分類してあります。その0
〜9（二桁目の数）までを説明してみたいと思います。

〔0〕となえうた

〔0〕とは00〜09までを含んでいます。これは、言うことが目
的のものです。

（03）悪口うた『でぶ、でぶ、百貫でぶ……』これは、唱えること
が目的なのです。その太った人と一しょにあそぶのではなく、太っ

た人が近くを通ったので、からかったりするのが目的です。

『あの学校、いい学校。上がってみたら悪い学校。この学校変な
学校。上がってみたら、いい学校』

◇数を勘定すること、ひとつ、ふたつ……。これは、わらべう
たでも、何でもないし、研究の対象にもならないように思われま
す。ところが、私は、わらべうたを集めに行った時は、必ず一か
ら百まで数えてもらうのです。ブランコなどで、友だちが集まっ
ている、「30になったら代りましょう」とやっていますね。とこ
ろが代るのがいやだから、降りない。そういうのを見越して『お
まけの、おまけの汽車ぼっぱ、ポーッと鳴ったら降りましょう』
と、こういったのが、くっついていたりします。こうなると、本当
の、わらべうたですが、私の重要視している点は、数えるリズム
が地方によって、みんな違うということです。特に違うのは、29
―30、39―40、49―50……という、ところですが、この数え方は、
何種類かありまして、それによって、ある一つの文化圏を決める
ことができるくらいです。

この間から、利根川の流域を調査していますが、調査を始めて
から三年目ですが、利根川の上流から下流まで、兩岸の小学校を
調べていくのです。ある地域では、（49―50）をよんじゅう・く
ー・ごうじゅうとし、また、ある地域では、よんじゅう・く・ご
うじゅうと、シンコーションのように言うのです。後者のよう

に言う地域は、利根川の北岸から、福島、仙台までつながっています。ところが南岸なのに後者の数え方の人がいったり、北岸なのに、前者の数え方をしている人がいたりします。混じっているのです。

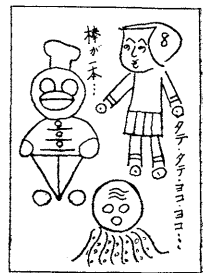
利根川は、よく調べてみますと、江戸時代には、今のような流れではなく、グニャ、グニャ曲がっていたのです。二つの数え方が混じっている一つの理由は、その流れの変化であり、もう一つは、昔から、橋がかけられたりして交流があった。ということもあります。

わらべうたは、ごまかしのきかないものです。どんなに大きくなくても、小さい時にうたったわらべうたを覚えているのです。そして、わらべうたに入らないような簡単な、数をかぞえるだけでなく、歴史的な事実を表わすデーターになるのです。

(07)は、かえうたです。先程言いましたように、『今は山中、今は浜……』が『今は夜中の三時頃……』のように変わってくるのです。かえうたは、日本の子どもたちの間では盛んです。それには、時代は反映されますし、メロディーも少しは変わってくるのです。

「一」 絵かきうた

これは、日本の特徴です。世界中を探してもなかなかありませんが、日本では特に最近多いです。



『みみずが三本よってきて…
…あられがボツボツ降ってき
て、あつという間に蛸入道』
『にいちゃんが、三円もらって
豆買って、口をとんがらかし
て、あひるの子』 縦・縦・横・横・丸書いてチョン……』とや
っているうちに、女の子ができた、

『棒が一本あったとき、葉っぱかな、葉っぱじゃないよ蛙だよ…
…』とだんだん大きくなり、最後には、コックさんになってしま
うのがありますね。これは、全国の子どもたちが知っています。
なぜなら、私たちがこれを集めた時に、間宮芳生氏に頼んで、編
曲してもらい、N・H・Kで、くり返し、くり返し放送したので
す。ですから、全国の子どもたちは、「絵かきうた、何か知って
ると聞くと、みんな『棒が一本……』を言います。これは、われ
われの実験のデーターの一つになっています。テレビやラジオが
どのくらい、子どものあそびに影響力を持っているか、また、テ
レビで習ったのは一つの形ですが、地方の子どもたちは、自分た
ちの方言になおし、二、三年間にどれだけ、オリジナルなものに
なったかの、実験になるのです。

考えてみますと、わらべうたは、本当は何人かの子どもたちが
集まって、一しよにあそぶゲーム、あるいは少なくとも二人で向

い合わせて、お手合わせをするなどのゲームが多かったのです
が、絵かきうた、というのは、子どもが何人か一しょにやっ
ても、結局は一人のものです。絵をブツブツ言いながら描いて
ると、最後にバツと誰かの顔になったりするのです。そういうも
のは、楽しく、スリルに富んでいて、イマジネーションも豊かな
のですが、しかし、一人のゲームなのです。こういうのは、一種
の現代性の反映かもしれません。しかし、外国の子どもたちは、
このようなちまちまとした、せせこましいあそびはしません。日本
は狭い所におおぜいの人が住んでいますから、あまり人に迷惑に
ならないようにあそぼうと思うと、絵かきうたぐらいに、なっ
てしまうのです。ある点では、悲しい現実を表わしているのかもし
れませんが、また一方、日本人らしい手先の器用な子どもたちの
性格を表わしているとも言えます。

〔二〕 おはじき石蹴り

これは、日本には、あまりありませんが、『いちじく にんじ
ん きんしょに しいたけ ごぼうの むかご……』と言って、
おはじきをするのがあります。外国にはたくさんあります。例え
ば、アフリカの北、ナイル川の上流の砂漠の子どもたちは、砂漠
に落ちているラクダの骨を勘定したり、放り投げたりしてあそび
ます。世界の国々により、投げる物が違います。品物が違うと投
げ方もあそび方も違ってきます。

〔三〕 お手玉

これは日本で盛んですね。お手玉は、元々女の子のあそびであ
り、昔のあそびだと思っていました。ところが去年、新宿区と中野
区のある一区画を集中調査したことがあります。その時に、小学
校六年生の男の子が、「僕は、変わり者だから、女の子があそぶお
手玉なんかうまいんだよ。昔は、そういうものを持っていた、一
生懸命にやったんだ。今は弟や妹が持っているから、借りてして
みていい」と言い、やってもらったら、最初から終りまで知っ
ているのです。そしてその子が自分のことを「変わり者」と言っ
たものですから、本当にそうなのか聞いてみたのです。（私たち
は、小学生を対象として調査していたのですが）中学生に聞いて
みると、現在、中学校の二年生の男の子が、小学校五年の時に、
ものすごく、お手玉がはやって、男の子なら誰でもやったんだそ
うです。だから非常に短い周期で、あるわらべうたが、はやった
り、すたれたり、あそびが一般に広がったり、一部になったりす
るのです。

先程、申しました集中調査について、少し説明を致しますと、
一つの調査法は、世界中に網を張って、いろいろな、わらべうた
を集めてくる方法、つまり extensive（広範囲）な調査です。それ
に対するのが、ある所を、intensive に、つまり集中的に調査する
方法で、きわめて必要なのです。中野区と新宿区を調査したの

は、ちょうど十三間通りと目白通りが交叉する所で新しく道路を建設していたので、「道路というものは、子どもたちの文化の交流に、どのくらい障害になるか」を知りたかった、ためです。道路の幅が広くなると、両側の子どもたち同士はあそべなくなってしまう、グループが全然別になり、違ううたをうたい、違うあそびをするようになってしまいます。

ところが、道路の幅が細いと、両側の子どもは、一しょになつてあそぶことができます。

私は、そういうことを徹底的に調査する必要があると思ひましたので、道路を作る前の去年、調査をしたのです。そして道路ができ車が通っています。二年後に、また調査をしようと思ひています。その時に、わかつたのですが、七年前に簡単な調査をした時と比べると、六年間のうちに、わらべうたの世界が、ガラガラと変わってしまいました。七年前にたくさんうたわれていた月、火、水、木は、誰も知らなくなり、その代りに『かぼちゃの種を蒔きました。芽がふくらんで、花が咲いて、じゃんけんぽん』というのできているのです。こういうふうに、どんどん変わっています。また東京の狭い路地毎にみんな違うやり方をしているのです。

『月・火・水・木……』にしても、私たちが一〇〇集めた中で、九十三種類、違うのがでてきましたから、大変なバラエティです。

そして、これが、本当のわらべうたです。みんなが誰でも同じようにうたうのは、わらべうたではないのです。このようにして、お手玉うたは、依然として、またある時、突然に女の子ばかりでなく、男の子の間にもはやる可能性のある、根強いゲームです。

〔四〕 ま り つ き

まりつきうたは、皆さんよくご存知ですね。一つだけご注意したいのは、「昔のまりつきと、今のまりつきと比べると、どちらがテンポが速いか」という問題です。世の中は、どんどん進歩していきますから、昔の人は、のんびりとしていて、今の人は何でも速くやるだろうと思うと、まりつきの場合は、反対なのです。昔のまりは、海辺に住んでいる人は、コンブ、ひじき、山の人、苔などを集めてきて、乾燥させて、紐で巻いて、まりを作りました。そして着物を着ていましたから袂を持ち、下に坐りこんでするので、バウンドする距離が非常に短いのです。

『ですから、『トントンたたくは、誰さんじゃ……』『山王の、お猿さんは、赤いおべべが大好き……』と非常にテンポの速いものが、明治、大正時代にあるのです。後になってゴムまりができ、女の子がスカートをはくようになり、立ち上がってまりつきをやるようになると、まりつきのテンポは、ゆっくりとなり、芸が込んできました。昔は手の甲にまりを乗せたりしていたのが、足の回りを回したり、膝でたたいたり、ぐるっとまわったり、さ

まざまなことをやっています。

まりつきで思い出すことは、去年、北海道でまりをつき、最後に、足でまりを踏んづけるあそびがあったのです。

『田舎のおじさん、田んぼ道行けば、蛙踏んでキャッ、ごめんなさいね』というのです。「おもしろいなあ、まりを踏んで、蛙を踏んだなんて、いいアイディアだ」と思っていたのです。その年に鹿児島に行ったのです。そこで同じまりつきをしているのです。ところが、北海道から鹿児島の間、どこにもないのです。

いろいろな所で聞きましたが、知らないというのです。「北海道と鹿児島にあって、その中間にない」ということは、どういうことなのか」

文化というものは、まるで波紋のように輪になって広がっていく、という考え方があるのです。ですからその考え方でいくと、東京、あるいは京都などが文化の中心で、そこから蛙が踏んづけられていき、両端地域で、同じ頃に蛙が踏んづけられている。と考えるのが普通なのですが、中間に、なかなかないのです。

このまりつきのことを、四国で聞きましたら、今、21歳の女の人が10歳くらいの時に、やったことがあることが、分かりました。すると今から10年前には、四国にあったことが分かります。したがって、何年か前には、東京や関西にあったことが考えられます。ついでに、「伝播」のことに関して補足しておきますと、

先ほどの『かぼちゃの種……』（あるいは、お寺のお尚さんが種を蒔きました）……じゃんけんぼん』負けた人は、『一本箸（二本箸）コーチョコーチョ』といって脇の下をくすぐったり、『叩いて、つねって、こんちきしょう』などと、言うものもあります。この罰の方は昔からありましたし、アメリカにもあります。ところが、『かぼちゃ……』の下りは、最近になって、東京の辺りからでてきたものなのです。それが、どのような勢いで広まっていくか、興味津々なのです。利根川の辺りでは、東京に近いところではありますし、遠く離れた所でも、ボツボツ現われてきています。それから、いろいろなところを調べていくと、あまり遠くへは行っていないのです。この間、土佐を調べた時は、山の中は全然ないのです。

ところが、海岸地帯には、時々、知っている子がいるのです。それも年上の子（中学生）は、知らないのです。ある小学校では、四国では例外的なのですが、全員が知っていて、ものすごくはやっていたのです。どういふことかと思ったら、昭和四十一年に東京から転校してきた子がいるのです。その子が広めたことが、はつきりしていたのです。そうすると、昭和四十一年には、少なくとも東京で広まっていたことが分かりますし、今、ちょうど広まりつつある時期なので、おもしろいと思います。

〔五〕 じゃんけん

じゃんけんを、ただ、したのではおもしろくないので、前に言つたように『かぼちゃの種を蒔きました。……』としたり、お手合わせを盛んにやって、最後にじゃんけんをしたり、だんだんと長く伸ばして、ゲームを作ったりする。このような、じゃんけんぼんが、一つのグループです。

もう一つは、じゃんけんの中に使われる、グー、チョキ、パーをいろいろなふうに使うのです。グリコ、バイナッブル、チョコレートと言つて、飛んでいったり、この頃では、コマースヤルが盛んになってきたものですから、グロンサン、パブロン、チオクタン、などと製薬会社の宣伝をしているようなものもあります。

〔六〕 お手合わせうた

『せっせっせーのよいよいよい』で始まり、いろいろなのが地方によつて、あります。この種類―手を使うものは、なんと言つても日本が多いです。

〔七〕 なわとび

なわとびは、ゴムなわと、普通のなわと、二種類あります。ゴムなわにしても、いろいろなのがありまして、ゴムなわを伸ばして、三角形にし、足がかからないように、その間を飛ぶ、などがあります。この中には、『金鶏輝く日本の……』などという、何のために歌っているのか分からない、クラシックな歌が残つていて、そのうちに「長崎の鐘」なんていう流行歌に途中で変わった

りしています。

普通のなわとびでは、「お持ち」の人がいて、一人ずつ入つていったり、固まって入つていて、一人ずつ抜けたり、『ほーら、ほーら、青山の、えんどう豆の、お殿さまの、お姫さまの……』

『満州の山奥で、遙かに聞こえる豚の声、一匹ブー、二匹ブー……』(満州が、信州になったり朝鮮になったりしていますが……)これは昭和の初期にできたものだと思います。

それから、明らかに、日本のものだと思つていた、

『熊さん、熊さん、回れ右 熊さん、熊さん、両手をついて

熊さん、熊さん、片足あげて……』とうたいながら両手をついたり、片足をあげたりして、なわの中を飛んでいくあそびですが、この間、アメリカのコネチカット州の小学校で録音をしていましたら、「Terry Bear, Terry Bear, Tuche the ground. Turne around.」という、ほとんど同じようなものが、あるのです。全く同じアイデアです。ですから、もしかすると、これは、じゃんけんとは反対に、大正、あるいは昭和の初期に、誰かが、アメリカの遊戯を輸入したのかもしれない。わらべうたというのは、なかなか、国際的なものですから。なわとびは、江戸時代にはなく、少なくとも明治からのものです。

〔八〕 からだあそび

からだあそびというのは、ちょっとおかしいんですが、道具が

なく、身体の部分、あるいは、全体を使ってあそぶものを、そのように言いました。一番簡単なものは指を使うものです。

『ちょっと、あんた、みかけによらない……』

手を使うもの、『ずいずい、ずっころばし……』

また、『竹の子一本ちょうだい……』と言って数珠のようにつながって、引っ張るもの、『こいの滝上り』『お船がぎつちらこ』など、身体全体を使うものがあります。

〔九〕 鬼 あ そ び

仲間の中から、特定の人を選び出し、それを鬼にする「かくれんぼ」「鬼ごっこ」も入りますが、最後に鬼を決めるものも入るのです。ですから、「通リゃんせ」も、入ります。これが、だんだんと発展して、非常にドラマティックなものになります。

『あーぶくたった、煮えたった。煮えたかどうか食べてみよ、むしやむしやむしや、まだ煮えない。……』まん中の目かくしをしている子の頭をつねったり、触れたりするものですから、その子はだんだんと、フラストレーションを生じてきて、後になって、お化けになってできたりする。

『もう、子どもは寝ましよう』『ボンボン』『あ、もう十二時だ』と外から『トントントント』『どなた』『風の音』『ああ、風かじや、またねよう』『トントントント』『どなた』『あずき、まんなのお化けー』キャーと言って逃げて、鬼がそれをつかまえ、つかま

った人が鬼という。非常に長くて、ドラマのようであり、構成もよくできています。〔九〕になると非常に複雑になってきます。

つまり〔〇〕〔九〕になるにつれて、単純で、部分的なものから、次第に複雑で構成的なものという順序で並べたのです。

これが日本の子どもを中心にした、分類のしかたです。あまり体系的ではありませんが、これをさらに、材料を多くしていきたいし、外国のわらべうたも、もっと研究していきたいと思います。

最後に、もう一度、言っておきたいことは、「わらべうたを決して侮ってはいけない」ということです。わらべうたは非常に正直に日本人の音楽的性格を表わしたものです。わらべうたをよく研究し、そこから音楽教育を始めることが必要です。「わらべうたから出発したら、高級な音楽が教えられないのではないか」と心配している人がいますが、高級な音楽は教える必要がないのです。もし子どもを、わらべうた的段階から引き上げることができなかつたら、代りに高級音楽をやろうと思っても、それはエスキモーと同じことになってしまいます。

子どもに何か押しつけてやろう、型にはめてやろうとは決して思わずに、子どもとあそびながら、子どもの中にある音楽性を、是非、引き出して、ずっと先の日本人の音楽文化を豊かなものにしていただきたい、思います。

(東京芸術大学)

(幼児教育講習会講演より)